

「一物二価」の週刊誌

ふらっと入った書店で週刊誌を買い求めた。「定価 400 円」だったので、百円硬貨4枚を支払ったところ、何と1円のお釣りをくれたのである。不審そうな顔をした私に対して店主曰く、「本体価格 370 円に、8%の消費税 29.6 円を加えて 399.6 円ですが、消費税は1円未満を切り捨てるので 29 円となり、販売価格は 399 円となります」と涼しい顔で至極明快な解説をしてくれた。手にしたレシートを改めて見てみると「週刊誌 399 円(うち消費税 29 円)」とプリントされていた。しかし、それなら最初から表紙に「定価 399 円」とはっきり表示すべきではないのかと些か腑に落ちなかった。

そこで、試しに他の書店で同じ週刊誌を買ってみたところ、そこでは1円のお釣りをくれなかった。レシートを見ると「週刊誌 400 円(うち消費税 30 円)」と堂々印字されていた。399円で販売した書店は、正直過ぎるのだろうか。或いは、400円で定価販売した書店は消費税を口実に少しでも儲けようと考えたのだろうか。納得し難い「一物二価」に出食わして、はたと考え込んでしまった。

定価 400 円の週刊誌が、書店によっては現実に異なる消費税を適用して2通りの価格 399 円と 400 円で売られている。どうして同じ週刊誌なのに、こんな「一物二価」が生まれたのだろうか。こうなると1円のお釣りをもらえるか、もらえないかは書店の裁量次第だ。雑誌社が価格を 399 円と表示し、書店が表示価格通り販売すればまったく問題ない。それでいながら雑誌社は親切心から書店の手間を省いてやろうとしたのか、はたまた1円でも多く儲けさせてやろうと深情けしたのか、399 円を安易に切りのいい 400 円に切り上げたことが問題をややこしくした。雑誌自体はいくらに価格を設定しようと構わないが、400 円では雑誌社が書店の儲けに余計な手を貸していることにならないか。

初めて「一物一価」の法則を学んでから大分時が経つが、これだけ価格が堂々と表示されれば、間違いなくそれは「一物一価」だと信じていた。それが書店によっては同じ価格表示でも、「一物一価」ならぬ「一物二価」、「399 円」と「400 円」がまかり通っていたとは…。

びっくりぼんである。